

「怯まず・屈せず・逃げず」宇沢弘文さんとの想い出 田中康夫

宇沢弘文さんと最後にお目に掛かったのは「三・一一」の直前でした。

「TPPを考える国民会議」代表世話人に就任された宇沢さんをお招きして、僕との対談番組「宇沢弘文が語るTPP」がBS11で放送されたのは二〇一一年三月五日。

それから程なく、宇沢さんは臥せられます。「政権交代前」も「政権交代後」も、「適格な認識・迅速な決断と行動・明確な責任」の何れも欠落した面々が現状維持・現状追認を繰り返す、更には、既得権益ペンタゴン^①、とでも呼ぶべき「政官財学報」が跳梁跋扈する日本に悲憤慷慨されて。

「この名称は、中国、インドネシア、台湾、ロシアが参加しない状況を象徴していますね。だって、^②環太平洋^③を意味する Pan-Pacific でなく、太平洋の向こう側 Trans-Pacific と呼ぶ Partnership ですもの。なのに、環太平洋連携協定と意図的

誤訳をするのですから、いかにも小賢しい手合いが考えそうな^④羊頭狗肉^⑤ですよ」。

収録前の雑談で僕流の講釈を加えると、相変わらずな田中さんですねえ、という表情で微笑され、言葉を継がれました。

「不平等条約（安政の改革、悲惨な敗戦（昭和の改革）に続く、第三の開国（平成の改革）だなんて、僕はもう我慢できなくて、棺桶から這い出して闘おうと決めたのです」。

神妙な面持ちで承る場面だったのかも知れません。でも、まさに相変わらずな僕は、「至らぬ点を改める^⑥改国^⑦ならばいざ知らず、壊す国の^⑧壊国^⑨ですもの」と駄洒落の如く応じ、収録が始まりました。

面識のなかった宇沢さんに面談を申し入れ、その警咳に初めて接したのは、県知事に就任して一年四ヶ月後の二〇〇二年四

月三日。

現在は大手町フィナンシャルシティ・サウスタワーなる超高層ビルの地権者でもある日本政策投資銀行の、以前の本店内。長きに亘って顧問を務められていた設備投資研究所の一室でした。

「信州・長野県のあるべき姿を描いて頂けませんか」。向こう見ずにも当時四五歳の僕が申し上げると宇沢さんは、語られませんでした。

「あなたの『脱ダム』宣言」。感動してね、大変にね」。

なんとも、こそばゆい。その気恥ずかしさから逃れるかのように、僕は暫し、饒舌に語ってしまいます。

ダムを造らねば洪水を防げないと言いながら、数十年経っても竣工どころか、着工にすら至っていない。二〇〇歩譲ってダムが必要悪だとして、でも、完成までの間、堆砂の浚渫や護岸の補修、森林の整備、さまざまな実施すべき手立てを行おうともしない。

実は、本当にダムが「地方」に必要なのではなく、「中央」へと巨額の資金が環流する装置として、ダム建設という公共事業を維持したいのだと思います。であればこそ、「日本の背骨に位置し、数多の水源を擁する長野県に於いては出来得る限り、コンクリートのダムを造るべきではない」と宣言したのです。

だって、宇沢さん、動脈瘤が破裂寸前だから大外科手術を行わねばと集中治療室へ駆け込む前に、こうした予防医学の取り組みを常日頃から怠らぬことこそ、治水の原点ではないでしょ

うか。

「脱ダム」宣言は、造る・造らないの不毛な二項対立ではありません。「この国のかたち」ではなく、「この国のあり方」を問い直したいのです。

そうして、それこそは全国津々浦々の、地域を愛すれども青息吐息な土木建設業の人々が、胸を張って携われる、本来の、そして新しい公共事業のあり方なのです、と。

宇沢さんは、身の丈を超えた僕の我が儘な申し出を快諾下さいます。

量の拡大や維持から質の充実へ。そうした「心算」を人々が共有する社会のあり方。信州・長野県での具現化を夢想していた僕は、地方自治法で設置が義務付けられていた総合計画審議会という無味乾燥な場を「換骨奪胎」し、良い意味で「止揚」変容させるべく、委員の一人として宇沢さんを任命します。

併せて、五十嵐敬喜、宇沢弘文、加藤秀樹、川勝平太、神野直彦、野田正彰の各氏で構成される専門委員会を設置し、その座長にも就任頂きます。

約二年の歳月を費やして宇沢さんが執筆下さった「未来への提言〜コモンズから始まる、信州ルネッサンス革命〜」が、長野県総合計画審議会最終答申として纏まったのは二〇〇四年三月。

破綻した計画経済の如き、机上の空論な形式知に立脚した大本営発表の数値目標を羅列する、従来「総合計画」とは異なる

り、それは私たちが実現すべき社会のあり方を指し示す、一つの壮大な物語でした。

実は、その上梓までの間に僕は、出直し知事選を経験します。「県民の生命や財産を守ることよりも自己の理念の実現を優先させ……独善的で稚拙ともいえる政治手法により県政の停滞と混乱を招き、多くの県民の期待を裏切る結果となった」との文面の、県議会に於ける不信任決議可決に伴って。

けれども、宇沢さんは、それ以前も、その間も、それ以降も、変わらず僕を支えて下さったのです。

同じく形骸化していた公共事業評価監視委員会に、息吹、を与えるべく、磯崎新、保母武彦の両氏と共に委員に就任下さいました。「私たちがめざすべき社会」と題して職員や県民に本庁舎の講堂で講演を、飯縄高原に位置する自治研修所で深夜まで談論風発、ビールを飲みながら部局長と語り合っただけだったのも、更には二〇〇二年に創設した長野県原産地呼称管理制度に基づき認定マークが貼られたワインと日本酒を持って、渋谷は神山町の御自宅にお邪魔したのも、何れも懐かしい思い出です。

宇沢弘文さんという碩学から勇氣と希望を頂戴し、就任時に計画されていた九つの県営ダム計画を全て中止し、ダムに代わる河川改修計画を実行に移します。直轄事業として長年、調査費が計上され続けてきたダム計画も、事業費の三割を県が負担する仕組みを逆手に取って、多目的ダムとしての基本計画を国が廃止し、事業を中止することとなります（僕の就任前に、冬

季五輪会場に向かう取り付け道路と橋梁の建設費へと、ダム建設事業費の半分を、転用していた、しかも、あろう事か、活断層の真上に計画されていた浅川ダムだけは、僕の下で副知事を務めていた総務省出身の人間が知事に就任するや復活してしまいました）。

「信州はいま、政策的にも、財政的にも危機的状況にある」との一文が冒頭に記された「未来への提言」は、「世紀末」なる単語を編み出したダンテ・アリギエーリの時代から紐解かれます。而して最後にトマス・ペインの「コモンセンス」に言及しています。

それは、自然環境・農村・都市・産業・教育・医療・福祉・地方分権・中央官僚制度からの「自律」・長寿型文明の一〇節に亘って、「ゆたかな社会を求めて」「社会的共通資本とコモンズ」を詳述下さった長尺の、まさに、未来へ向けての叙事詩でした。

「社会に漂う閉塞感と将来に対する不透明感を打破するべく、信州から発せられた『脱ダム宣言』は、……これまでの中央集権的な政策の流れを転換し、地域に暮らす市民一人ひとりが主人公となる「人間の回復」をめざして社会を改革することを主張し、社会を、地域から、「変えることができる」としたのである」。

「信州革命」を求めて」と題した最終章で宇沢さんは、過大な評価を記して下さいます。畏れ多い限りです。

魍魎魍魎たる世界に紛れ込んだ僕は、県債残高が一兆六〇〇

○億円を超え、利息の返済分だけでも一日に一億四二〇〇万円に達している事実を知り、吃驚します。行政機関としての長野県庁も、報道機関としての地元メディアも、殆ど県民に伝えていなかったのです。

今でも変わりませんが、往時は更に無手勝流だった僕は、徒に県民に不安を与える愉快犯か、と県議会議員や地元メディアに指弾されながらも、宇沢さんの薫陶を受け、更には職員との協力と県民の理解を得て、在任六年間、全国四七都道府県で唯一、起債残高を連続減少させ、基礎的財政収支も毎年度黒字とします。

その一方で、財政再建が目的となつては本末転倒ですよ、とも宇沢さんに忠言を受けました。御説ご尤も。ここでも僕は粹がつて、小学校全学年の三〇人学級を全国で最初に実現します。人が人のお世話をし始めて成り立つ福祉・医療・教育・環境・観光こそ、「優しさ・確かさ・美しさ」を併せ持った二一世紀型の新しい労働集約的産業だ、なあって、高言^①して。

「田中さんはね、学者としては大したことないんですよ。」

最後にお目に掛かった際、収録の中で宇沢さんは仰いました。これ又、御説ご尤も。すると、こう補足して下さいました。

「だけどね、『脱ダム』宣言^②で表現された」そういうウイジヨン^③をね、実際の政治の制度にインプリメント、要するに実現していくというね、そういう点で最高ですね。」

又しても、こそばゆい。照れ笑いしながら、応じました。

「まあ、アンガージュマンの駆け出しみたいなレヴェルですけど」と。

僕は改めて思います。

社会や家族の人間関係や文化・伝統といった、市場では数値に換算しにくい類い^④など価値ゼロだと切り捨ててしまふ、人間の体温が感じられない、液晶画面上の「経済学」が席卷する遙か前から、宇沢弘文という鴻学こそは、「知識は行動を伴わねば、教養は決断を伴わねば、意味が無い」と自問自答しながら走り続けた。真のアンガージュマン^⑤だったのだと。

などと縷々申し上げていると、宇沢さんはビールグラスを片手に楯桶の中から起き上がり、呟くかも知れません。

「田中さん、僕はね、一切の政治的暴力に、反抗し続けたアルベール・カミュを守り切れなかったジャン・ポール・サルトル、彼がね、好んで用いた単語で語られるのは、少し苦手でね。」なあって。

* 最後の出演番組及び「未来への提言」は <http://www.nippon-dream.com/> で「宇沢弘文」と検索することで御覧頂けます。

(たなか やすお・作家)